

Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知 の無錯乱性証明の一視点

岩 田 孝

仏教論理学派におけるヨーガ行者の知覚認識¹⁾(=ヨーガ行者の知)を考察するに際しては、ヨーガ行者の知が、感官知や意識と同様に、現量となる為の二条件(無分別性と無錯乱性)を満すということの証明が中心となる論題である。その中で、後者の無錯乱性の証明に関しては次の難問が予想される。ヨーガ行者の知が、世間の人にて直接知覚されない事象—過去未来や極遠の物事—を、修習の力によって目の当たりに鮮明に知覚できるとするならば、この知は世間の人の認識と共通しないので、その知の妥当性は如何に確立されるのか²⁾、むしろ、ヨーガ行者の知は、実際にはないもの(avidyamāna)を実際にある様相(vidyamānakāra)にて表象する故に「それでないものをそれ」と見る錯乱ではないか³⁾、という問題である。これは、ヨーガ行者の知そのものの成立に関する本質的な問題であり、それだけに解き明かし難い。そこでこうした問題を念頭に置きつつ、さしあたってそれを解く為の一視点を見い出すことをもって本論の目的としたい。

陳那がヨーガ行者の知を現量の種類に組み入れた(cp. PS I. 1. 6cd)のを受けて、法称はヨーガ行者の知に無分別性と無錯乱性とが成立することを現量説において説明している。無分別性の説明は比較的論理的であるのに対して⁴⁾、無錯乱性については「ヨーガ行者が、修習前に、聞と思との二慧によって対象を確定し、その後修習の極みにおいて、以前に確定しておいた対象、即ち顛倒のない対象、を捉えるので、ヨーガ行者の知は錯乱ではない」という趣旨の説明があるとは雖も(cp. PVin I pp. 72, 30-74, 4)その論述は説得力を欠いている。何となれば、この説は、極端に言えば、最初から正しいと判別された対象だけを選出して認識するので、ヨーガ行者の知は錯乱ではない、という見解になり、Steinkellner 教授も指摘される如く、ヨーガ行者の知の無錯乱性を根本的に説明したとは言えないからである⁵⁾。註解者の説にも法称以上に掘り下げた議論は見当たらない⁶⁾。一方、Prajñākaragupta (=Prajñākara)は、PVのPramānasiddhi章の註において、ヨーガ行者による過去・未来の知覚に矛盾の無いことを、反論への論駁という形で論証している。この論証はヨーガ行者の知の無錯乱性を吟味する上で有効な資料

(143) Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知の無錯乱性証明の一視点 (岩田)

である。以下に Prajñākara の論証における思惟方法を跡付けてみたい。

ヨーガ行者による過去・未来の知覚は錯乱であるという反論の論旨は次の様である。(1) もし、過去未来の事象が将来に現在に知覚されるならば、現在に知覚されるものは現在の事象であるから、過去・未来の事象は現在の事象になろう、それは不合理である (cp. PVBh p. 113, 14 f.)。 (2) 仮りに過去・未来の事象が現在の事象とすれば、それらは現在に存在することになるが、過去・未来の事象がどうして現在に存在できるのか (bhāvi bhūto vā katham asti) (cp. PVBh p. 111, 31)。

まず、反論 (2) への論駁では、Prajñākara は、かかる反論の生ずる原因が「現在に存在する」という場合の「存在」の意味を反論者が取り違えている点にある、と考えて、ヨーガ行者にとっての「存在」を次の様に規定する。

〔物事が〕直接覚証されること (sākṣātkaṛaṇa)こそが、この物事の存在することである (bhāvasyāstitvam)。……〔世間上〕“現在にある”と思われるもの (vartamānābhīmata) (ex. 柱, 瓶等) に関してさえも……〔それらの〕直接覚証によってこそ、それらの存在性が認知され、それ以外のこと〔例えば今時間との結合 (vartamānakālasambandha) (cp. PVBh p. 112, 7) 等〕によってではない (PVBh p. 112, 1-2)。

反論者は世間の常識に従って、物事は世間的な“今、ここ”という時空限定と結びつくから存在する、と思いつくが、実は「存在」の本質的規定は、そうした世間の時空限定を受けるのではなく、「直接覚証されること」にある、従って過去・未来の事象が、ヨーガ行者によって直接覚証される限りヨーガ行者にとって存在する、ということは矛盾ではない、と Prajñākara は説くのである。

所で、ヨーガ行者の知が「過去・未来や極遠の対象」を現に目の当たりに知覚するという様に、何等かの形で時間空間に関係し、しかもヨーガ行者にとっての存在が世間的な時空限定によらないのであれば、ヨーガ行者にとっての「物事の存在」は、世間的な時空系とは別な時空系において規定されるのではないかと推察される。Prajñākara の場合、結論を先に言えば、ヨーガ行者の修習状態での知の説明において、少くとも時間要素については、日常的時間系とは別な時間系が意識的に用いられ、さらにその時間系の別立こそがヨーガ行者の知の無矛盾性 (→無錯乱性) を証明する重要な論拠となっている。この点を簡単に紹介しよう。

Prajñākara はヨーガ行者による「過去・未来の知覚 (darśana)」を「〔現に〕知覚されていない事象 (adrśyamāna) の知覚」と置き換えて分析を始める (cp. PVBh p. 113, 5 ff.)。その「現に知覚されない」ことは、修習している当のヨーガ行者にとって成立するのではない。もしそうであれば、過去・未来の知覚は「自身にて

〔現に〕知覚されていない事象を〔現に〕知覚すること〕になるが、これは「石女の女性でも母であること」と同様不合理と看做されるからである。従って「現に知覚されないこと」とは、当該のヨーガ行者にとってではなく、それ以外の人（即ち世間の人）にとって成立する。つまり、ヨーガ行者による過去・未来の知覚を正確に記述すると次の様になる

〔当該のヨーガ行者〕以外〔の世間の人〕によって〔現に〕知覚されていない〔という意味で“過去・未来”と看做される事象〕を〔ヨーガ行者が現に〕知覚する (PVBh p. 113,7: anyenādrśyamānaṃ paśyati)。

世間の人々の時間系では“過去・未来”と看做される事象が、ヨーガ行者の時間系では「現在」と顕われるというのであるから、ここには、世間の人とヨーガ行者とがそれぞれ依止する所の時間系の相異が導入されている。換言すれば、Prajñākara は「ヨーガ行者が過去・未来を現に知覚する」という命題には、相異なる二つの時間系からの事象規定が混在する、と見抜いたのである。將にこの点に着目して、それぞれの事象がどの時間系で成立するかを明確に区別すれば、先の反論 (1) に指摘された様な「過去・未来がそのまま現在になる」という矛盾は解消する、と Prajñākara は考えるのである。

〔世間の人々の時間系で“過去・未来”と限定される〕そ〔の事象〕は、当〔のヨーガ行者〕によって〔現に〕知覚されているが故に (drśyamānatayā) その限りでは〔ヨーガ行者にとっては〕必ず現在なのである (vartamānam eva)。……〔ヨーガ行者の認識対象は、元来、現在のみの事象であるが〕そ〔のヨーガ行者の認識対象〕を“過去〔未来〕”等と〔分別上限定すること〕は、〔ヨーガ行者とは〕別な〔世間の人々が世間の時間系に乗ること〕に依って〔可能になる〕 (PVBh p. 113, 7-8)。或いは、ヨーガ行者〔自身〕が禪定状態より出離した後に〔世間的時間系に戻って〕“過去〔未来〕等”と言語表現し実践的に活動すること (vyavahāra) から〔可能になるのである〕 (PVBh p. 113, 14)。

以上が、ヨーガ行者による過去・未来の知覚を認めても、過去・未来がそのまま現在になるという矛盾には至らないことの論拠である。この Prajñākara の論点をまとめると次の様になる。反論者は「ヨーガ行者が過去・未来を現在に知覚する」という命題の中の“過去・未来”と現在とが同一の時間系での時間様相であると考えて、「過去・未来が現在というのは矛盾である」と批判する。それに対して Prajñākara は、両者は別々な時間系に立つのでそうした矛盾に陥らない、と論駁する。つまり、“過去・未来”という時間規定は世間の人々の時間系上にあり、一方「ヨーガ行者がそれらを現に知覚する」ということから帰結される

(145) Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知の無錯乱性証明の一視点 (岩田)

「〔それらが〕現在にあること,〔それ〕は,〔当の〕知覚する〔ヨーガ行〕者のみ〔の時間系〕にて成立する……。〔一般に〕一方の〔時間系での〕時間〔規定〕が他方〔の時間系での時間規定〕を限定することはどうして合理であろうか(anyakalāh katham yukto nāmānyasya viśeṣakah)」(PVBh p. 113, 16)。それは、恰も同じ様に“白”と表現されるものでも、馬の有する白さが牛の白さを限定できないことと同様である (cp. PVBh p. 113, 17)。従って世間の人の時間系で“過去”“未来”と見える事象が、それとは別なヨーガ行者の時間系にても同様に「過去」「未来」と規定されなければならない必然性は全く無い。それ故にヨーガ行者が、世間の人の時間系で“過去・未来”とされる事象を、ヨーガ行者の時間系上で「現在」と見ることは、何等矛盾ではない、というのが Prajñākara の見解である。

以上により、Prajñākara においては、ヨーガ行者による過去・未来の知覚の無錯乱性の証明が「ヨーガ行者と世間の人との時間系を別立する」という角度から進められていたことが明らかになった。この様にしてヨーガ行者の知の無錯乱性が示されると、この考え方をさらに拡張して、ヨーガ行者と世間の人との時間系のみならず存在系をも別立することによって、少くとも「時間空間の関与する諸事象についてのヨーガ行者の知が錯乱ではないこと」をより一般的に示すことが可能であろうと察せられる。この証明には次の基本的な分析が不可欠である。即ち、ヨーガ行者の時間系と世間の人との時間系とがどの様に異なるのか、両者にとっての存在の相異を含めて空間系の相異をどの様な基準に従って立てるかという点の分析である。これらの課題については別稿にて詳しく論ずる予定である。

略号 PV III: Pramāṇavārttika 現量章 PVI I: Pramāṇaviniścaya 現量章
PVBh: Pramāṇavārttikabhāṣya PSI: Pramāṇasamuccaya 現量章

「Yogijñāna」: 拙稿「ヨーガ行者の知の整合性について、法称説を中心として」(『比較思想の世界』(峰島旭雄編集) 1987年出版予定)

- 1) ヨーガ行者の知の歴史的展開については川崎信定「一切智者の存在論証」(『講座大乘仏教』第九巻 pp. 294-339) 参照。
- 2) 例えば PVBh p. 113, 26 f. 参照。
- 3) 例えば Nyāyabhūṣaṇa (Bhāsarvajña) p. 172, 15 ff. 参照。
- 4) PV III 283 ab, 284; 戸崎宏正『仏教認識論の研究』(上) p. 377; 拙稿「Yogijñāna」第一章参照。
- 5) cp. Steinkellner, Yogische Erkenntnis als Problem im Buddhismus, in: Transzendenzerfahrung, Vollzugshorizont des Heils, Wien, 1978, pp. 127-128.
- 6) 拙稿「Yogijñāna」第二章参照。

(早稲田大学講師)